

TSFで 孕み系

感度増大
感覚遮断
幸せエンド

カガミ
アキ
の場合

KAGAMI AKI NO BAAI



目次

登場キャラクター	4ページ
第1章 野外チャレンジ	5ページ
第2章 小遣い稼ぎ	19ページ
第3章 マンガ喫茶での出会い	40ページ
第4章 一つ屋根の下	64ページ
第5章 赤ちゃん部屋	76ページ
第6章 調理台	85ページ
あとがき	89ページ
作品紹介	90ページ



登場キャラクター

■ 加賀見 秋生／亜紀（カガミ アキオ／アキ）

主人公。フリーターをしていたが現在無職。

コミュニケーションが苦手で、自己評価が低い。

頼れる人がおらず、自暴自棄になっている。

地元を離れて関東に出てきている。帰る気はない。

■ 真壁 篤志（マカベ アツシ）

フリーランス。体格がよく、眼鏡をかけている。

趣味はコンピュータ全般とマンガ。メイド好き。

誠実な男だが、他人と積極的に交わらないために女縁はない。



第1章

野外チャレンジ



裾の長いメイド服を着て、頭にホワイトブリムをつけた。こうした姿は真壁まかべの趣味だ。

僕は今、知り合って三週間目の男、真壁篤志あつしの部屋で暮らしている。真壁は、大柄で筋肉質で眼鏡をかけた人物だ。

僕の名前は加賀見亜紀かがみあき、性別は女性。男性のときの名前は加賀見秋生かがみあきお。体が女性になったのは四週間前。『Eゲーム』という謎のアプリのせいで肉体が組み変わった。そしてアプリが提示する性的なチャレンジをこなしていき、一週間目に真壁に出会い同棲するようになった。

「本当に、このメイド服で外出するんですか？」

マンションの玄関。真壁の前で、僕は両手を広げてくるりと回る。

「俺の趣味に付き合わせるようになりますがお願いします」

真壁はいつも冷静で紳士的だ。初めて出会ってセックスをしたときも、ていねいに僕に相對してくれた。

「真壁さんが満足するなら、僕はそれでいいですけど」

少し首をかしげて言う。本当は、この格好で外出するのは、ちょっと恥ずかしい。もつとふつうで目立たない姿がよかった。だって、このあと野外セックスをする予定だから。そのための準備はすでにしてある。

ブラジャーは最初から外している。ショーツも脱いでいる。スカートの下の下半身は、黒いストッキングとガーターベルトだけだ。股間を覆う布をなくしているのは、どこでも



他のチャレンジは、やらなければいつの間にか消えている。しかし、感度増大と感覚遮断はずっと残り続けている。どこかのタイミングで必ずやらないといけないチャレンジなのだ。RPGなら中ボス戦といったところだ。今日は野外プレイとともに、感覚増大を片付けてしまう予定だ。

「真壁さん。僕の格好、変じゃないですか？」

玄関で靴を履きながら、上目遣いで見上げた。

「大丈夫です、問題ないです。しっかり体を隠せています。もともと屋敷の黒子に徹するための服ですから。まさか、その下が全裸に近いとは気づかれないでしょう」

真面目な顔で真壁は分析する。悪い人じゃないし、礼儀正しい人なんだけど、こういう話をしていると、ちょっとズレているよなあとと思う。

「じゃあ真壁さん、外出前に1ポイント稼いでしましましょう」

「分かりました」

僕は両手を背中側に回して、胸を前に突き出した。

メイド服の布地は厚みがあるために乳首の形は分からない。真壁は両手を上げて、正確に僕の乳首の場所を探り当てる。機械のような精度で突起をつまみ、きゅっ、きゅっ、とつまんで刺激を与えてきた。

マッサージをされたように全身が弛緩する。すでに十分に開発されている体は、少しの刺激で変化する。膣壁がゆるんで湿ってきた。両脚に力を入れて引き締める。油断をする

と愛液が垂れてくる。このあと歩くときに足下を濡らしてしまう。

自分の口元が開き、熱を帯びた吐息が漏れるのが分かった。その淫気の漏れを塞ぐように唇が重ねられた。

口を開き、真壁の接吻を受け入れる。真壁の舌が入ってきた。彼の太く力強い舌をなめて、交尾のように絡め合う。

乳首への刺激は続いている。口内の求め合いも激しさを増す。全身からじわりと汗が出る。男を誘うフェロモン。自分の周りに甘い香りがただよっていることを自覚する。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『乳首ディープキス』を達成しました。加賀見亜紀は1ポイントを獲得しました！》

女性の声で通知が読み上げられる。

『Eゲーム』のポイントは、1ポイントにつき一万円に換金できる。最近の僕は、このお金を生活費に充てたり、服飾代にしたりしている。また、大人の玩具の通販にも利用している。

乳首から手が離れた。絡めていた舌が解放される。僕の顔の高さに合わせて腰を屈めていた真壁が背を伸ばした。

今すぐセックスをしたかった。求めるような目を向けると真壁に制された。

「今日のメインは公園です。このまま始めたら、また家を出ずに終わってしまいます」

昨日、一昨日の失敗だ。玄関で挿入して、そのまま夜まで交合を続けた。同じことを繰

り返さないためにも、我慢して外出しなければならない。

「行きましよう、亜紀さん」

「はい、真壁さん」

二人で玄関の扉を抜け、マンションのエレベーターに向かった。



真壁の住むマンションは駅に隣接するように建っている。そこから五分ほど歩き、目的の公園にたどり着く。木々が生い茂り、野球場もある公園。まだ午後二時ぐらいで、人はそこかしこにいる。こんなに明るい場所で、人にばれずに行為をできるのかと思い緊張する。

「真壁さん。さすがにこの時間帯は無理がないですか？」

「誰もいないところでセックスしても、野外プレイの意味がないでしょうから」

真壁は、野外プレイに対する独自の概念を有しているのだろう。真壁は謎のこだわりを持っていることが多い。そして一度言い出すとなかなか引き下がらない。そのことは、ともに生活をしているから知っている。

真夜中の誰もいない公園でもよいのではと思う。

子供もまだ遊んでいる日中に、性行為を試みるのは無謀すぎる。恥ずかしいのは真壁で

「今日のこの時間帯は野球場の使用はありません。小学校も終わっていないので子供たちもいません。この近くに人が来ることはごくまれです。たとえ来たとしても、建物の陰にある茂みの中をのぞく人はいないでしょう。誰か近づいてくれば気配で分かります。結合を解いて、そしらぬ振りをすればやり過ぎせます」

「本当にやるんですか？」

スカートの裾をぎゅっと握って上目遣いに尋ねる。

「素早く済ませた方がいいです。ぐずぐずするほど危険度は上がりますから」

真壁は合理的な人間だ。野外プレイであっても、成功の確率を上げるために努力する。

下準備をして、事前調査をして、現地でも最大限の効率化を求める。

「分かりました、お願いします」

覚悟を決めた。真壁はうなずき、スマホを操作して『Eゲーム』を起動する。そしてツールの中から「感度増大」のボタンを押して、感度のスライダーを最大の十倍に設定した。

「なにか変化はありますか？」

「いえ、今のところはなにも」

「感度ですから、やはり刺激をしないといけないのでしょうか」

真壁は僕の尻に触れる。

「うううんつつつつ」

軽く触られただけなのに、神経に直接触れたような感覚が脳まで上がってきた。全身を、

電気をまとった刷毛で、なでられたように感じた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫、れす」

快感がまだ体内でこだましているようだ。刺激が全身を駆け巡り増幅されていた。これで乳首やクリトリスを触られたらどうなるんだろう。考えるだけで恐ろしくなった。

「前戯は必要ですか？」

「それだけで動けなくなってしまいそうです」

「では、手早く挿入しますか？」

「そうしてください」

「後背位で行きましょう。周囲への警戒と、有事への対処を考えると、それが最適だと思います」

「もう全部、真壁さんにお任せします」

言われるがまま建物の壁に両手を突いた。スカートをたくし上げられ、ストッキングにガーターベルトの下半身を露出させられる。

ショーツをはいていないから、お尻がすーすーする。さらけ出した花卉に屋外の風が当たっているのが十倍の感度で感じ取れた。

「ローションをたっぷり入れたオナホルのようになっています」

「報告はいいですから、早く挿入してください」





このままでは死んでしまう。真壁は片手で僕の腰を支えたまま、もう片方の手でアプリを操作した。

全身を駆け巡っていた快感の反復が消えた。挿入されたペニスの感覚と、中出しの余韻だけが残された。

《コングラチュレーション！ チャレンジ『感度増大』を達成しました。加賀見亜紀は5ポイントを獲得しました！》

《コングラチュレーション！ チャレンジ『野外プレイ』を達成しました。加賀見亜紀は10ポイントを獲得しました！》

真壁は僕の体を支えて左足を持ち上げる。犬がおしっこをするときのように大股開きになった。

真壁の右手の太い指が、僕の膣に入ってくる。真壁はひだのあいだまで探ってザーメンをかき出す。精液がきれいに取れたところで、ティッシュペーパーを使って股間を優しく拭いてくれた。最後の仕上げにウェットティッシュできれいにしてくれた。僕は脱力したまま真壁の奉仕を受け入れた。

スカートの裾を下ろして自分の足で立つ。まだ腰がガクガクしていて、まっすぐに立つことが難しかった。

「俺がおんぶしましょうか？」

真面目な顔で真壁が尋ねてくる。それもいいかなと思ったあと、慌てて首を横に振った。

「真壁さん、それは大変まずいと思います」

「どうしてですか？」

「おんぶをすると足を広げますよね。そして真壁さんは背が高いですよね」

「そうですね」

「そうすると、子供の視点からスカートの中をのぞいたら、全部見えてしまいます。僕、なにもはいていないですから」

「あっ」

二人で顔を見合わせて笑った。小さな子供に、変な性癖を植えつけてしまうのは、避けた方がよい。

少し離れた木陰で休んでから帰ることにした。二人で芝生に座り、公園を過ぎ去る風を浴びて時を過ごした。

「おだやかな時間ですね、真壁さん」

「ええ、亜紀さんと出会ってから、怒濤のような日々でしたから」

真壁は真面目な顔で答える。

僕は、真壁と『Eゲーム』のチャレンジをハイペースでこなした。そして真壁も『Eゲーム』をインストールした。

僕は女役で、真壁は男役だ。

その真壁の『Eゲーム』の画面には「ツール」というボタンがあり、三つの項目が並ん

でいる。

—— 断面表示。

—— 感度増大。

—— 感覚遮断。

断面表示、感度増大は利用した。残りは一つ、感覚遮断が残されていた。



第2章

小遣い稼ぎ



探さないといけない。しかし全てが億劫になっていた。

スマホの通知音が聞こえた。広告メールが届いたのだろう。やり取りする友人はいない。一方的に送られてくる広告が、世間との唯一の接点だった。

スマホを手に取り、画面を見る。

「ゲームの広告か」

ふだん、スマホでゲームはしない。課金できるお金はないし、能動的に何かをやる気も起きない。ふだんは、ショート動画を見て時間をつぶすことが多い。

届いたメールには、ゲームのタイトル名と説明が書いてあった。名前は『Eゲーム』。ちょっとHな体験ができるアプリだそう。さまざまなチャレンジをこなすとポイントがもらえて換金できる。ぼんやりと読んでいると、一つのフレーズが目にとまった。

——自分自身を変えて、新しい環境で人生をやり直せます。

まだ希望にあふれていた時期なら無視したはずだ。しかし現実には打ちひしがれている今なら違う。

試してみよう。なににも変わらなくても、今よりも悪くなることはないだろう。

アプリをインストールして起動する。高級クラブを思わせるシックなタイトル画面が表示された。

画面上部には『Eゲーム』というゴールドのロゴがある。真ん中より少し下には「ゲームスタート」と書いたボタンがあった。

「これを押せばいいんだよな」

嫌な予感がした。自分の人生が大きくねじ曲がってしまう不安。これから墜落する飛行機に乗るような違和感。紙やすりの上で指を滑らしたような、ざらりとした不快感。

今ならまだ引き返せる――。心の中で誰かが言った。

「ふんっ」

どうとでもなれ。

一呼吸置いてボタンを押した。そして画面が変わるのを待った。

スマホから強烈な光が発射された。その光が全身を包み、視界を真っ白に染め上げる。

肉体だけが白い空間に投げ出された。上も下も右も左もない世界。とてつもなく大きな存在が自分を見下ろしている気配を感じた。

カシャリ、と音がした。自分の左腕の一部が、ルービックキューブのように回転した。驚いて左腕を見ると同じ音がして、今度は左右の足が変化した。音の間隔が短くなる。

最後には音で全身が埋め尽くされる。体をサイコロステーキのようにバラバラにされて、違う形に組み上げられた。

光が消えて元の部屋に戻ってきた。先ほどと同じように天井を見上げてスマホを持っている。

いったい何があったんだ。夢でも見ていたのか。心臓が激しく鼓動していた。夢と切り捨てるには妙なリアルさがあった。

「一万円、増えている！」

眠気が吹っ飛んだ。

アプリをインストールして起動しただけで一万円のボーナス。これで数日のあいだ食費に困らずに済む。感謝の気持ちでいっぱいになりながら、次は「チャレンジ」ボタンを押してみた。

画面が切り替わり、リストが表示された。

——裸で自撮りをする。4ポイント。

——外出する。1ポイント。

——コンビニでコンドームを買う。3ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5ポイント。

なんだこれは？ 混乱した頭の中を整理する。

そういえば届いたメールには、『Eゲーム』は少しHな体験ができると書いてあった。

こんなことをして、なぜお金をもらえるのか分からない。しかしリストの行為をして、もし本当にお金を得られるのならば、必死になって次の仕事を探さないで済む。

「最初の一つ以外は、外出しないといけないんだよな」

屋外での活動は、なにか悪いことに巻き込まれる恐れがある。闇バイトという言葉が頭に浮かぶ。実験をするなら部屋の中でやるのがよいと思った。

腰を上げて立ち上がった。服が、ぶかぶかになっている気がする。ジャージの袖は長い

し、ズボンの裾をかかとで踏んでいる。

上のジャージを脱いで、肌着を頭から引き抜いた。上半身裸になった自分の体を見て動きを止める。しばらくじっと観察したあと、胸にぶら下がっている大きな乳房に触れてみた。

「おっぱいがある」

巨乳というほどではないが、しっかりと大きなおっぱいがあった。乳輪はピンクで、乳首はちょこんと盛り上がっている。変化はそれだけでない。体が全体的に華奢になっている。肌はなめらかになり白くなっている。腰はくびれて、へその周りの肉は柔らかくなっていた。

——加賀見亜紀、性別女性。

『Eゲーム』の画面に表示されていた名前と性別を思い出す。白い世界の中で、自分の肉体が組み変わったのは事実だったのか。

おそろおそろズボンとパンツを下げる。腰が広くなり、太ももが太くなっていた。そのあいだの逆三角形の隙間には、なにもなかった。正確に言うならば、薄く陰毛があり、数分前までは存在していた陰茎や睪丸が消失していた。

女性の体になったのか。指で股に触れて、幻ではないことを確かめる。簡単にお金が手に入るかもと浮かれていた自分を呪った。

「ということは——」

頭を切り替えて、もう一度チャレンジリストの内容を確かめる。

——裸で自撮りをする。4ポイント。

——外出する。1ポイント。

——コンビニでコンドームを買う。3ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5ポイント。

この項目は、自分が男性なのか女性なのかで大きく意味合いが異なる。特に最後の項目は致命的だ。男性なら、はだけたシャツを着た陽キャですませられるが、女性ならただの痴女だ。

外出するだけで1ポイントというのも、自分が女性になっているのなら容易ではない。

どんな服で外に出るのかという問題が生じる。

頭が真っ白になって、しばらくぼうっとした。

上半身裸になって、下半身もズボンとパンツを下ろしている。せっかくだから裸の自撮りをしておこうと思った。

これでポイントを換金できるのならば、四万円を手にすることが出来る。最初の1ポイントと合わせて五万円。これほどありがたいことはない。

まず、スマホのクラウド連携を切った。裸の写真をアップロードするのはまずい。そして自撮りモードで自分の裸を撮影した。特に意味はないが、ピースもしてみた。

《ピロンッ!》





疑念が頭をよぎった。それ以上に、金の誘惑は魅力的だった。









店の端の方に行ってドキドキを鎮める。このままコンドームを持ってレジに行ったら、完全に痴女じゃないか。男物のジャージ、すっぴん、ノーブラ、乳首勃起、コンドーム。さすがに駄目だろうと思う。

顔が真っ赤になっているのが分かった。ガラス窓に反射する自分の姿を見て、先ほど裸で自撮りしたことを思い出す。裸の自分はきれいだった。顔も整っており美人と言える容姿をしていた。あんな彼女が欲しかった。首を横に振って妄想を振り払う。

さっさとコンドームを買って帰ろう。人目を気にして棚からコンドームを取り、レジに移動した。

商品を出してバーコードの読み取りを待つ。おじさんの店員と目が合った。おっぱいを
見せれば五万円、触らせればさらに五万円。チャレンジリストを思い出して顔を真っ赤に
した。

おじさんが恥ずかしそうに目をそらす。自分の乳首が限界まで張っているのが分かる。値段を言われてPayPayで支払う。どうするか。見せるか？ おじさんの表情を見て迷った。

「おじさん」

「なんでしょ？」

「おっぱい、見たい？」

目の前の中年男性が、首筋まで顔を真っ赤にする。

店員は冷静に、「そういうことをしては駄目です」と諭してきた。そうだよ、真面目に働いている人に悪いよね。少し頭が冷えた。見せて触らせて合計十万円。惜しいとは思ったがレジを離れた。

店を出る前にスマホを確認する。コンドーム購入で3ポイント増えていた。

チャレンジリストが更新されていた。レジから離れたせいか、店員関連のチャレンジが消えていた。

——コンビニ前にいる男子高校生たちにおっぱいを見せる。10ポイント。

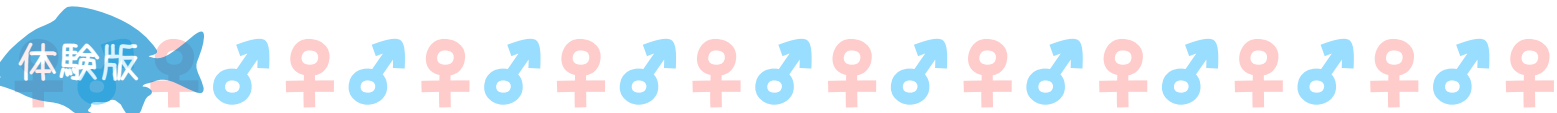
——コンビニ前にいる男子高校生たちとセックスをする。20ポイント。

すぐに画面を消してスマホをポケットにしまった。おっぱいはともかく、セックスはまずい。人生破滅ではすまない。これはなし、ありえない。しかし、おっぱいを見せれば10ポイント。見せる時間は書いていない。一瞬見せればいいのだろうか。

下腹部がむずむずした。パンツの中が濡れていた。自分が女性として興奮しているのが分かる。

自動ドアを抜けて、たむろしている男子高校生たちの近くに来了。少年たちは、僕の姿を見てもじもじしている。僕が発情しているのが丸分かりなのだろう。

高校生たちは制服の股間のあたりがふくらんでいた。僕はジャージで全身を隠している。それなのに裸で立っているように見えているのかもしれない。乳首のせいだろうか。ある



令できそうな気がした。

「触ってもいいよ」

チャレンジリストにないことを口走る。命令されたわけではない自分の意志だ。

男子高校生たちは顔を見合わせたあと、一人が手を伸ばしてきた。乳房に触れ、乳首をつまんできた。

「痛っ」

思った以上の刺激に、思わず体をくの字にした。男子高校生は驚いて手を放し、一步下がる。

痛みで目が覚めた。自分が恐ろしいことをしていると自覚する。肌着を上げたまま、ジャージの前を両手で閉じて、路地裏から飛び出した。

夜の街を息を切らして走る。ジャージの下でおっぱいを出したままファスナーを上げて胸を隠した。

アパートにたどり着いた。階段を駆け上がり部屋に入る。鍵をかけて明かりを点けた。床に座り大きく息をする。頭の中が混乱していた。自分は何をやっているのだろうと疑問を持った。

そうだ。報酬を獲得しているはずだ。急に気持ちが悪くなった。

早く確かめなければと思い、スマホを出す。外出の1ポイント、素顔の1ポイント、コンドーム購入の3ポイント、おっぱいを見せた10ポイント。「換金」ボタンを押す。十

五万円を獲得した。脳内麻薬が大量に出た。これで当面はしのげると思った。

「そういえば、音を切っていたんだ。新しいチャレンジが追加されているかもしれない」
鼻歌交じりでリストを表示する。

——自身の女性器に指を挿入してかき回す。1ポイント。

——自身のクリトリスを十分間愛撫する。1ポイント。

——自身の乳首を三十分間愛撫する。1ポイント。

全ておこなえば三万円。徐々に感覚が麻痺してきている。『Eゲーム』に命じられたまま自身を開発している。もう当座の生活費は稼いだ。ここで止めることもできる。

心臓が大きく鳴っていた。自分の顔がにやけているのが分かる。

これはアプリに命令されていることなんだ。自分の意志ではなく指示に従っているだけなんだ。

1ポイントしかもらえないことは、もうどうでもよかった。背中を押してくれさえすればよかった。一番簡単なのはどれだろう。短い時間でできるものから順番にやっていこう。座ったまま、ズボンとパンツを下げた。ローションを塗りつけたように、股間がびしょ濡れになっている。下半身だけ裸になって割れ目に右手の指を這わせた。ぬるぬるしていて指先までは簡単に入れることができた。

指を入れてかき回すんだったよな。奥まで入れるとわずかに痛みがあった。そういえば処女膜があるんだった。思ったよりは痛くなかったが個人差があるのだろうか。まだ指が

触れているところがじんじんする。これをかき回さないといけないのか。どうするのか迷った。

快感と相殺すればいい。そのことに気づいて明るい気持ちになる。

左手を股間に触れさせ、クリトリスを探した。どれがその場所なのか分からない。わずかに硬い場所を見つけた。愛液をなすり付けていると、だんだん気持ちよくなってきた。

スマホを見て開始時間を確かめる。十分間愛撫すればいい。右手の指を入れたまま、左手の指でクリトリスを軽くつまみ続ける。息が荒くなっていく。自然に声が漏れ始める。

「ううう、ううう」

呼吸に合わせてクリトリスをつまみ、膣の中をかき回す。だんだんコツがつかめてきた。痛みと快感は同時に与えるのではなく交互にした方がいい。感覚の落差が脳をかき回す。

徐々に痛みが引いてきた。こんなに早く消えるものなのかと疑問を持つ。作り替えられた体は、本物の女性の体なのか。姿形だけ似せたアバターなのではないのか。

「うううううんっ！」

快感の波が意識の防波堤を超えた。男性だったらこれで終わりだ。しかし女性ならまだ続けることができる。指での愛撫をしばらくおこなった。

体を傾けてスマホを見た。いつの間にか十分が経っていた。次は乳首を愛撫しないとい

手が三本ないことがもどかしかった。クリトリスと膣、どちらかをやめないといけない。

考えたあと臍から指を抜いた。

肉壺をかき回し続けた指をながめる。愛液と血が混じってべとべとになっている。どんな味がするんだろう。指を口で含んで、処女の血と愛液の味を確かめる。美味しいものではなかった。しかし、その行為を思いつき、実行したことが自身を興奮させた。

次は乳首だ。ジャージのファスナーを下ろして肌を露出させる。高校生たちに胸を見せたことを思い出す。あとき肌着を上げたまま駆け出した。おっぱいの上に肌着がまくり上げられたままになっている。

右手の指で右の乳首をつまむ。こりこりとつぶしながら愛撫し始める。目をつむり、自分のいる場所をコンビ二横の路地裏だと想像する。男子高校生たちに乳首を触らせる妄想をする。

男子高校生たちが自分の胸をガン見している。その少年たちにささやくように言う。乳首をつまんでみたい？ コクコクと首を縦に振る男子たち。彼らに向かって艶めいた笑みを向ける。一人ずつ順番だよ。男の子たちはジャンケンをして列を作る。そして順番に乳首を丹念に愛撫する。

指先だけでは飽き足らず口をつけて吸う者も出る。僕の股間はびっしりと濡れる。男の子の一人が、僕のズボンの色が変わっていることに気づく。そしてしゃがんで顔を近づけてにおいを嗅ぎ始める。

——どうしたの、セックスがしたいの？ 優しくできるならいいよ。壁に手を添えるか

ら、ズボンをゆっくり脱がして、クリトリスを口で吸ってちょうだい。

股間にかかる吐息。自然と開く大陰唇。硬く勃起したクリトリス。唇が触れ、軽く歯で噛まれる。ひゃつと声を上げる僕。そのまま口に含まれ、舌で執拗に転がされる。男性のときに亀頭だったものをなめ回される。

「あっ！」

妄想の外で体が絶頂を迎えた。足がピンと張り、頭とかかとでブリッジしたみたいになる。

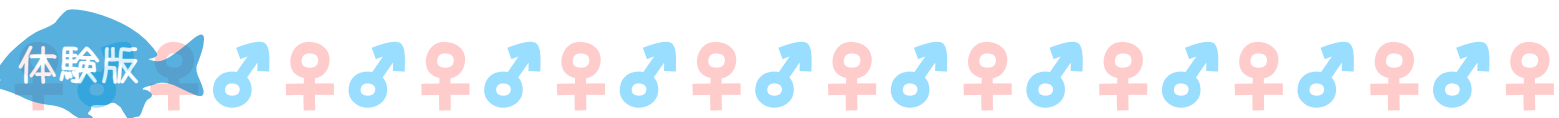
乳首とクリトリスを愛撫する手は止まらない。目をつむり、妄想の中の男子高校生たちに犯し続けられる。まだ経験したことのないセックスを想像して、淫乱な顔を背後の男の子たちに向ける。

何度か絶頂を経験して、腕と指が疲れてきた。もう三十分経っただろうかと思い、スマホの時計に顔を向けた。

一時間も乳首とクリトリスをいじり続けていた。何度も強くつまんだせいで、どちらもじんじんと痛かった。やり遂げた充実感が心の中に広がる。びちよびちよになった手を、肌着でぬぐって『Eゲーム』を確認した。

タイトル画面の『E』の文字にルビが追加されていた。E s t r u s。どういう意味なのかと思いネットで検索した。

——発情期、繁殖期、性欲と性行動が高まる状態。





第3章

マンガ喫茶での出会い

